



# 姉さんSMKE!!

わん♡たま〜!

著：沖田和彦

画：すめらぎ琥珀

原作：あるてみす。



ぶちばら文庫

## プロローグ

## ● 登場人物



**東出 圭**

Kei Higashide

受験のために、祐太が居候しながら勉強を見てもらうことになった従姉。何事にも厳しく、甘えん坊な祐太を常に罵倒するが、溺愛ともいえるほどの弟好きでもある。機械がダメで、家事は苦手。

「うぎやあああああ！」

山内裕太は、情けない悲鳴を上げて哀願した。

「や、やめ……圭ねえ！ やめて！」

「ふっ」

東出圭は不敵に笑い、長い前髪を手で払った。

祐太の従姉である。

美人でプロボーシヨンも拔群だが、とにかく気が強く、曲がったことが嫌いで、上下関係の礼儀にうるさい。悪戯好きの少年時代に、強烈なトラウマを植え付けてくれた張本人である。

そして、彼女の特技は罵倒だった。

「おまえは私の玩具だぞ？ 玩具をどのように扱おうが私の勝手だろう」

「無茶苦茶だ！」

「黙れ。玩具に決定権などない」

圭の足に力が込められ、ぐりっ、と踏みにじられた。

「ぐあああ！」

陰囊が軋み、ふたたび悲鳴を放った。

祐太は床に転がされて、股間を踏みつけられているのだ。なんとか逃げようとしたが、



激痛に悶えるだけで立つことすらできない。

そもそも、この従姉に力技で勝てたことがなかった。

「つ、潰れる！潰れる！」

「潰れるなら、それはそれで良いじゃないか。私が踏みつけただけで、こんなに硬くして……立派に成長したと思ったら、ただのスケベに育ちやがって！」

「うう……」

祐太の顔が、屈辱と羞恥で赤くなった。

従姉の足にグリグリされて、あろうことか勃起してしまった。精巣を圧迫される痛みさえ、喉元過ぎればじんわりとした快楽に変換されていた。

けっして変態ではない——はずだ。なにしろ、多感で敏感な年頃だ。刺激を受ければ、勝手に膨らんでしまうものだ。

「ふん、だいたい、そんなに痛かったのか？たいしてでかくもないのだから、手術のときにでかくしてもらえ」

「よ、余計なお世話だ！比べるほど多く見たことあるのかよ！」

「なっ……」

ウィークポイントをえぐったのか、圭の顔色が変わった。

「わ、私はおまえより年上だぞ！そのくらいの経験はある！」

「ぐあああああああ！」

怒りにまかせて、またもや股間を攻撃されたのだ。

「返事は？」

「わ……わかりました……」

あまりの激痛に、祐太は涙目になった。

素直な返事に氣をよくして、圭の頬が優しくゆるんだ。

「よろしい」

「で、でも、チンコを刺激されたら……」

「刺激されたら？」

圭は、じろり、とツリ目の瞳で見下ろした。

逆鱗に触れないように、祐太も慎重に反論した。

「勃起するに……決まってるだろ……？」

ほう、と圭はわざとらしく目を見開いた。

「おまえは足蹴にされて感じるのか？」

「……姉さん、酔っているだろ？」

「酔っていない」

しれっと断言された。

アルコールのせいで、圭の頬は鮮やかに紅潮している。ノーメイクでも艶やかな唇には、サディスティックな笑みが浮かんでいた。

「いや、ぜったい酔って……うつ」

腰の甘酸っぱい快感に、祐太は思わずうめいた。

圭に足の指でズボンの前を突っ張らせている亀頭の位置を探りあてられ、ぎゅっ、と敏感なくびれを締めつけられたのだ。

「そ、そんなこと……されたら……んっ」

足の指でペニスをしごかれて、祐太の口から甘い声が漏れてしまう。

「ふっ、良い音で鳴く。叩いたり、いじったりで、いろいろと音が変わるのか。玩具というより、まるで楽器だ」

圭はニヤニヤと笑っていた。

「どうだ？ 酔っていたら、このような器用な動きできぬであろう？ ん？ おや、ずいぶん硬くしているじゃないか？」

足の裏から伝わる感触を楽しむように、ぐりぐりと踵も押しつけてくる。

「お、男だからしょうがないだろ……」

そうだな、と圭は鷹揚にうなづく。

「たしかに、おまえは男だ。しかし、いいか？ 私に逆らおうとするなよ？ 男とか女と

かの前に、祐太は私の弟なのだから……私のほうが年上なのだからな！」

「圭ねえ、横暴すぎっ」

性懲りもなく、祐太は非難してしまった。

「なんだと？ 聞き分けの悪い変態野郎だ！」

「ひいひいひいっ」

攻撃を覚悟して目を閉じると――。

ジジジ、と音がした。

怒声はただのフェイントだったらしく、器用な足の指に祐太はズボンのジッパーを引き下げられてしまった。

ペニスは打撃の恐怖にも屈せず、興奮状態をキープしている。窮屈な空間から勢いよく飛び出し、ため息が漏れるほどの解放感を味わった。

「む……」

従姉が息を呑む気配に、祐太は恐る恐る目を開いた。

圭は、天井にむけて雄々しく屹立しているペニスを凝視していた。明るいところで見るのは初めてなのか、半ば茫然としているようだった。

ハッと祐太の視線に気付き、眉をツリ上げて逆上した。

「ふ、ふん！ おまえは、私に踏まれたり蹴られたりして、こんなに勃起するほど興奮し



ていたのか！ このド変態めっ」

「ぐおおおっ」

怒りにまかせた蹴りを股間にぶち込まれて、祐太は床の上で悶絶した。無邪気に勃起してただけなのに、あまりにも理不尽だ。

たしかに、室内とはいえ股間を剥き出しにして、年上のお姉さんの足でペニスを踏まれてよがっている姿は客観的に見て変態そのものだが――。

「そ、それを踏みつけてる圭ねえだって……」

つい反撃してしまう性分が恨めしい。

「私だって？ なんだというのだ？」

「へ、変態……うぐうっ」

ダイレクトに踏みにじられて、祐太はすぐに謝った。

「す、すみませんっ」

「もっと謝れ。誠意を込めてな！ 私は躰のできていない礼儀知らずのちんちんを、おまえに代わって教育してやってるんだ。それなのに、なんだその言い方は？ え？ 感謝したらどうだ？」

圭は威圧しながら、充血した亀頭をグリグリした。

「あ、ありがとう……」

「敬語」

「ありがとう……ございます」

「そうだ、それでいい」

満足げにうなずき、今度は優しく足でペニスをなではじめた。

「うっ……け、圭ねえ……く、くうっ」

無造作な愛撫に、祐太の股間が心地よく痺れた。爪先で裏筋を擦ったり、土踏まずで亀頭をこねたり、足の裏全体を使ってパンパンに膨張した肉茎を揉み込んだり、ぎこちない足の動きは自分でおナニーするよりもどかしかったが、予測できない意外性があるって未知の性感を与えてくれる。

足の指がシャフトを挟み込み、ぐっ、と根元に引っぱった。

「あ、あぁっ」

「どうだ？ 気持ち良いのか？ ほれ、おまえの汚い皮を剥いてやったぞ。ふふ、亀頭がピンク色



で可愛いじゃないか」

圭は大きな瞳をキラキラと輝かせていた。

勃起しても完全に露出していなかった亀頭が、一気にカリ首まで皮をめくられてしまった。鍛えられていない粘膜が空気にさらされて震える。亀頭はツヤツヤと真っ赤に染まって膨張し、針で突けばパチンと弾けてしまいそうだった。

ペニスを挟んだ足の指が、しゅっ、しゅっ、とリズムカルに上下する。しごかれるたびに、甘酸っぱい愉悅が祐太の腰からせり上がってきた。

「う……うっ……んっ」

屈辱的だが、女の子のように声が出てしまうほど気持ちよかった。

「ん？ なにか出てきたぞ？」

尿道口から、透明なカウパー液が滲んできたのだ。

「亀頭だけでは飽きたらず、汁まで出すのか？ この変態め！」

「そ、そんな……皮を剥いたのは……」

「口答えるなっ！」

「あああああっ」

激痛による悲鳴ではなかった。

足の指が赤剥けた先端をくるみ、小さな円を描くように揉み込んできたのだ。敏感な粘

膜が摩擦され、カウパー液が潤滑液となってヌルヌル滑る。祐太は思わず腰が浮きそうになるほどの快楽に襲われた。

「……どんどん濡れてきてるぞ。早漏野郎め。いきそうなのか？」

「ち……ちがつ……早漏じゃ……！」

祐太は、息を弾ませて喘ぐことしかできなかった。

「ほら、こんなのが良いのか？ ん？ ん？ ん？」

圭も興奮し、明らかに面白がっていた。

車のシフトレバーを動かすように、調子に乗ってペニスを小刻みに旋回させる。

「ちょ、ちよっと、待って！ け、圭ねえ……もう！」

祐太は、もはや限界だった。

「もう、なんだと？ 私の目を見て言ってみろっ！」

ぎゅっ、と強く踏みつけられた瞬間――。

「あああああつ、圭ねええええ！」

「え？」

我慢の限界を突破して、ぴゅっ、と尿道口から精液が射出された。

腰を中心に快感が爆発し、祐太の頭の中で閃光が弾ける。痙攣が止まらなかった。勝手に腰がガクガクと動き、そのたびに勢いよく白濁液が発射され、従姉の素足やジーンズを

汚していった。

祐太は、射精の余韻で陶然としながら思った。

（受験生なのに、なんでこんなこと……）

先行きが明るいのか暗いのか、事態は混沌としているが――。

彼にとって、高校最後の夏がはじまったのだ。

ぶちばら文庫

# 姉SUMMER! ねえさまー

2010年 9月30日 初版第1刷 発行

■著 者 沖田和彦  
■イラスト すめらぎ琥珀  
■原 作 あるてみす。

発行人：久保田裕  
発行元：株式会社パラダイム  
〒166-0011  
東京都杉並区梅里2-40-19  
ワールドビル202  
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、  
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©KAZUHIKO OKITA ©ARTEMIS

Printed in Japan 2010

PP001